

国際交流室と国際交流活動

菅原 隆行

International exchanging section at ANCT and some activities on international exchange

Takayuki SUGAWARA

(平成25年11月29日受理)

This thesis focuses on the history of international exchanges between Akita National College of Technology (ANCT) and institutes in abroad, mainly aiming at describing the exchanging activities among teaching staff. The story starts from the background where the agreement was concluded between I.U.T. "A" de Lille, France, and ANCT. Some articles reveal the reason why the international exchanging section was set up at ANCT. The thesis also reports recent expansion for international exchange from the aspect of activities on the international exchanging section. Final section deals with some problems and remaining issues on the international exchange at ANCT.

Keywords: 国際交流室, 国際交流協定, 東北地区高専での包括協定, ベトナム重化学工業人材育成プロジェクト

1. はじめに

本校に国際交流室が設置されたのは平成22年5月。それ以来本校在学生の海外派遣, 海外教育機関出身の学生の受け入れ, 海外教育機関所属の教員との交流と技術協力に対するサポートなどさまざまな活動を4年間にわたって行ってきた。本論では, フランス・リールA技術短期大学との交流協定締結にいたる経緯から始まり, 国際交流室設置が必要になった背景, 国際交流室のこれまでの活動を, 教員間交流と交流協定締結交渉の観点から述べ, 最後に本校の国際交流に関する今後の課題を述べて本論を締めくくる。

2. 国際交流室設置以前の秋田高専の国際交流活動

2.1. フランス・リールA技術短期大学との交流協定締結

本校が国際交流活動を開始するきっかけとなったのは, 平成20年2月に八戸高専からフランス・リールA技術短期大学(I.U.T. "A" de Lille)からの学生を,

短期間受け入れできないかという依頼がきたことだった。当時フランスでは日本文化に対する関心が高まり, それに伴い日本への短期留学を志望する学生が増加する傾向にあった。そのため, リールA技術短期大学と交流協定を結んでいた八戸高専単独での留学生受け入れでは間に合わない状態になり, 秋田高専にフランス人留学生受け入れを打診してきたのである。当時の教務主事よりリールA技術短期大学と本校との交流協定締結のための協力を依頼されたときに, 八戸高専からこの依頼を受けたときは半信半疑だったが, 国際交流活動に関しては全く実績を残していない本校にとっては願ってもない話だったので, この話を進めることにしたという裏事情を聞いた。本校としてどのように国際交流を進めるべきかを模索していた矢先に, このような交流協定締結のお誘いを受けたようである。

メールを通しての交流協定の文書内容に関する意見のやりとりののち, 平成20年6月にリールA技術短期大学と本校とが交流協定を締結した。それに従い, 次年度の平成21年度から4月~6月の3ヵ月間, リールA技術短期大学からの学生を短期留学生として受け入れた。

2.2. フランス・リール A 技術短期大学への学生派遣へ向けた準備

前節において、平成 21 年度から本校はリール A 技術短期大学からの学生を短期留学生として受け入れを開始したことを述べたが、次のステップとして本校の学生をフランスへ派遣するための準備を始め、その中の 1 つにリール A 技術短期大学への現地視察があった。



写真 1 リール A 技術短期大学の正面玄関

平成 21 年 12 月に当時の教務主事と、教務主事補で留学生担当であった私がリール A 技術短期大学で現地視察を行った。まずは、両校が各々の学科構成と教育カリキュラム、施設の説明を行ったあとお互いに意見交換を行なった。リールには本校の機械工学科、電気情報工学科、物質工学科に対応する学科があったものの、環境都市工学科に直接対応する学科が存在していなかった。しかしながら、リール A 技術短期大学の教員と意見交換を行っているうちに、生物工学科が間接的ではあるものの本校の環境都市工学科の領域を扱っていることが判明し、本校の全学科の学生が派遣対象にできることを確認した。

また、この意見交換の中でリール A 技術短期大学側から、本校からの派遣学生の英語力が TOEIC スコアで 500 点以上であること、そしてフランスへの留学期間を 3 ヶ月にしてほしいという希望が出された。TOEIC スコアに関してはできるだけこのスコアに近い学生を派遣することを約束したが、本校学生のフランス留学期間に関しては当時まだ本校側の体制が整っていなかったため、派遣初年度は 1 ヶ月でお願いしたい旨を伝え、リール A 技術短期大学側もこれに合意した。

その後学生寮、授業で使われる教室、食堂、機械工

学科、物質工学科の施設見学等を行ない、本校の学生をリール A 技術短期大学に派遣しても施設が整った環境

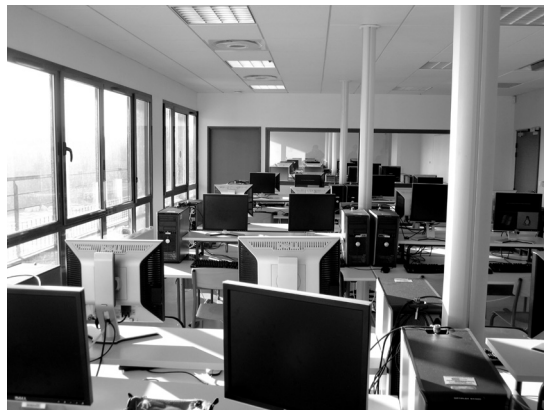


写真 2 情報処理教育を行う教室

の中で教育を受けることができることが確認できた。その他さまざまな準備が整った平成 22 年度から、フランスへの学生派遣が始まることとなる。

2.3. 国際交流の多様化

平成 20 年度から高専機構では、国際的に活躍できる素養を持つ実践的技術者の養成を行うこと、及びそのための共同教育の促進を図ることを目的として、すべての国立高専を対象とする「海外インターンシッププログラム」の実施をはじめた。これは全高専からの応募者の中から選抜された学生が日本企業の海外事業所等で 2～3 週間の期間就業体験するものである。本校も平成 21 年度からこのプログラム参加希望者の募集を開始した。

さらに、仙台高専広瀬キャンパスにおいて平成 21 年度から 3 年間にわたる事業である「大学教育推進プログラム・学生国際交流事業における教育の質の保証」が採択され、それに伴い東北・北海道地区での国際交流に関する情報ネットワークの形成と東北地区単位で連携して国際交流事業を推進する方向へと動き始めた。

このように本校を取り巻く国際交流に関する環境が急速に多様化の方向へ進み始め、いままでのような教務主事管轄での対応では限界になりつつあった。そのため、国際交流事業を専門に対応する部署の設置が必要となり、平成 22 年 5 月に国際交流室が誕生することとなった。

3. 国際交流室の活動と教員交流

3.1 東北地区高専と海外教育機関との包括協定へ

本校に国際交流室が誕生した当初の東北地区の国際交流の流れは、東北地区単位で連携して国際交流事業を推進する方向性であった。いままで1高専と1海外教育機関との交流協定締結であったものから、東北地区高専とフランス、フィンランドにあるそれぞれ複数の教育機関との包括協定の締結へ変化していき、そのための東北地区高専側の意見の集約、並びに高専間の諸連絡の方法として、東北・北海道地区での国際交流に関する情報ネットワークが機能するようになった。フランスの各技術短期大学との国際交流に関する取りまとめは八戸高専が、フィンランドのトゥルク応用科学大学・ヘルシンキメトロポリア応用科学大学の取りまとめは仙台高専広瀬キャンパスが行うことが確認された。

このような状況下で、まずフランスとの包括協定が先に進むこととなった。当時フランス・リールA技術短期大学と東北地区高専がそれぞれ個別に協定を締結していたが、これを機に東北地区6高専でまとまり、平成22年5月10日に包括協定が結ばれた。

一方でフィンランドの2つの応用科学大学に関しては、東北地区とフィンランドがお互いの教育機関の状況を知るための現地視察を開始することとなった。このため表1のように、平成22年度の国際交流室の活動は、本校とフィンランド2大学とのお互いの教員交流が主となっている。

| | |
|--------------------|---------------------------------------|
| 7月9日～10日 | 留学生・国際交流担当者会議（東京） |
| 7月30日～31日 | 東北・北海道地区高専海外インターンシップ担当者会議 |
| 10月20日～29日 | フィンランド・ヘルシンキメトロポリア応用科学大学、トゥルク応用科学大学視察 |
| 11月29日～30日 | フィンランド・ヘルシンキメトロポリア応用科学大学より教員1名来校 |
| 平成23年 1月12日～13日 | フィンランド・トゥルク応用科学大学より教員1名来校 |
| 平成23年 1月14日～15日 | 平成22年度大学教育GP事業評価委員会 (仙台高専) |

表1 平成22年度の国際交流室の活動



写真3 フィンランド教員の講演

フィンランドからの教員を本校に迎え入れた際には、お互いの学校の教育システムに関する意見交換、施設見学と授業参観により本校をより深く理解していただくと同時に、海外の様子を本校の多くの学生に紹介する目的で、学校紹介を主な内容とした講演をお願いするようにした。

| | |
|--------------------|---|
| 7月31日 ～8月1日 | 留学生・国際交流担当者会議（沖縄） |
| 8月9日～10日 | 東北・北海道地区高専海外インターンシップ担当者会議 |
| 11月23日 ～12月1日 | フランス・リール地区技術短期大学との包括協定締結に関する協議会 (フランス・リール) |
| 12月1日～2日 | フィンランド・トゥルク応用科学大学より教員3名来校 |
| 平成24年2月3日 | 東北地区6高専とフィンランド・ヘルシンキメトロポリア応用科学大学、トゥルク応用科学大学との包括協定締結 |
| 平成24年 3月15日～16日 | ベトナム・ホーチミン工業大学他より8名来校 |
| 平成24年 3月15日～16日 | フィンランド・ヘルシンキメトロポリア応用科学大学より教員3名来校 |
| 平成24年 3月18日 | 大学教育GP「学生国際交流事業における教育の質の保証」シンポジウム参加 (仙台高専) |

表2 平成23年度の国際交流室の活動

国際交流室と国際交流活動

こうして、フィンランド2大学と東北地区高専との教員間交流を通して包括協定締結への道を着実に歩んでいたのが、平成23年3月11日の東日本大震災により、東北地区の国際交流活動が約半年間の停止を余儀なくされることになった。本校の国際交流室の活動においても、平成23年度の実質的な活動は7月末に沖縄で行われた留学生・国際交流担当者会議から始まった。東北地区の国際交流活動が再開した後、フィンランド2校とのさらなる教員交流を経て、平成24年2月3日に東北地区6高専とフィンランド・ヘルシンキメトロポリア応用科学大学、トゥルク応用科学大学との包括協定が締結され、本校においてもフィンランドの2大学と学生の受け入れと派遣、教員間交流が正式に可能となり、平成24年度からフィンランド学生の短期留学受け入れを開始した。

一方、東北地区6高専でまとまってリールA技術短期大学と包括協定を締結したが、これにより東北地区6高専がリールA技術短期大学に多くの学生を派遣するようになったため、リールA技術短期大学1校で日本からの留学生を受け入れることが事実上困難となった。そのためリール側から、フランス側としても複数のI.U.T.（技術短期大学）でまとまって地区ごとの交流に変更したいという申し出があった。そこで平成23年11月23日～12月1日においてフランス・リールA技術短期大学を会場に、フランス側として新たに東北地区高専6校との交流に参加する技術短期大学との具体的な協議が行われた。新しく参加を表明したフランス側技術短期大学は、カレー技術短期大学、ベトゥーヌ技術短期大学、そしてランス技術短期大学の3校である。

| | |
|-------------|--------------------------------------|
| リールA技術短期大学 | 機械工学科 電気情報工学科 物質工学科 |
| ベトゥーヌ技術短期大学 | 機械工学科 電気情報工学科 物質工学科 環境都市工学科 |
| カレー技術短期大学 | 電気情報工学科 |
| ランス技術短期大学 | 電気情報工学科 |

表3 フランス各技術短期大学の対応可能学科

本校としても、今までは環境都市工学科（特に土木系の領域）に直接対応する学科がリールA技術短期大学にはなかったが、今回新たに参加する技術短期大学の1つであるベトゥーヌ技術短期大学において環境都市工学科が存在し、これですべての研究領域に携わる学生を、研究領域のミスマッチを起こすことなくフランスに派遣することができることになるので、このフランス側の提案を大いに歓迎した。この時の協議により、平成24年度からカレー技術短期大学、ベトゥーヌ技術短期大学、そしてランス技術短期大学の3校との学生交流を始め、それと同時進行でフランス側3技術短期大学との包括協定を進めることとなった。それ



写真4 カレー短期大学構内の様子

により、平成24年度から本校でもこの3技術短期大学との交流が開始され、平成24年6月24日に東北地区6高専とフランス・ランス技術短期大学、ベトゥーヌ技術短期大学（アルトワ大学所属技術短期大学2校）との包括協定が締結された。これにより、東北地区6高専とフランス、フィンランドにあるそれぞれ複数の教育機関との包括協定締結への動きが一段落することとなった。^{注1)}

3.2. ベトナムとの技術支援交流「ベトナム重化学工業人材育成プロジェクト」

平成 23 年度後期に、本校校長のもとに高専機構から電話依頼があったことから始まった。ベトナムに新しく石油プラントを建設することになったある日本企業が、JAICA に対してベトナム学生が現在建設中の石油プラントで将来勤務することができるよう、人材育成をして欲しいと要望した。そこで JAICA が高専機構を通じて、カリキュラム立案に対する協力を本校に依頼してきたのである。

それに従い、まず本校校長が平成 23 年 12 月にホーチミン工業大学他を現地視察するためにベトナムを訪問した。次に、ホーチミン工業大学の教育カリキュラムを調査し、本校のカリキュラム（特に化学工学に関する領域のカリキュラム）とどの程度乖離しているのかを明らかにしようとした。この作業には、本校では主に物質工学科の教員が携わることとなった。ベトナムの教育システムがあまりにも複雑であるためにそれを理解するのに時間を要したが、そのなかで判明したことは、ホーチミン工業大学の教育カリキュラムは実験・実習科目に関してはさほど問題ないものの、授業での理論学習が欠如しておりこれが最大の欠点であった。つまり、授業においては実験方法を説明し実験の時間ではそれに則り実験を行うだけで、理論を学生に説明する場がないのである。

平成 24 年 3 月中旬より、JAICA がベトナムの本件に関わる人々を訪問団として日本に招待することとなり、その視察コースの中に本校が加わった。平成 24 年 3 月 15 日～16 日の 2 日間、本校はベトナム・ホーチミン工業大学関係者他 8 名を迎え入れ、表 4

| | |
|----------|--|
| 3 月 15 日 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 構内施設見学 ・ 物質工学科（化学系）の本校カリキュラムの説明 ・ 校長による石油精製に関する講義 ・ 歓迎パーティー |
| 3 月 16 日 | <ul style="list-style-type: none"> ・ ホーチミン工業大学のカリキュラムに関する意見交換 ・ 今後の人材育成プログラムの進め方に関する意見交換 |

表 4 ベトナム訪問団本校視察のスケジュール

にあるようなスケジュールで対応した。この中で私たちは、技術者を育成する上では理論と実験の両方を身につけさせることが重要であることを印象づけるよう心がけた。

平成 24 年秋に JAICA から「ベトナム重化学工業人材育成プロジェクト」という名称で正式に協力要請を受け、それに伴い本校校長と化学工学に関わる本校教員 2 名が高専機構等とこのプロジェクトに関する詳細な打ち合わせを幾度となく行くと同時に、平成 25 年 3 月と 5 月の 2 度にわたり教員 2 名が現地視察のためベトナムを訪問した。その結果、平成 26 年度から化学工学領域に係る本校教員 1 名がベトナム・ホーチミン工業大学に駐在し、教育カリキュラム・教育方法等の指導と助言を行う形式での技術支援交流が始まることとなった。

3.3. 国際交流室だより発行と国際交流関連イベントの主催

国際交流室が設置されて 3 年目となった平成 24 年度に、国際交流室の活動を本校の内外に広くアピールする目的で「国際交流室だより」の発行を開始した。いままで本校の国際交流活動を他の教育機関に説明、宣伝する資料がなかったことも国際交流室だより発行の大きな要因の 1 つであった。平成 24 年 8 月 30 日に第 1 号を発行し、主に本校の教職員や学生に配布、そして中学校訪問の時の手持ち資料や 10 月末に行われる一日体験入学参加者への配布資料として用いられた。この後、年 2 回（9 月と 3 月）のペースで発行している。

また、平成 24 年度～25 年度にかけては教員交流の他に、国際交流イベントの主催を担当する時期と

| | |
|------------------------------|--|
| 平成 25 年 3 月 6 日～9 日 | 本校短期留学プログラムにシンガポール・テマセクポリテク学生 12 名と引率教員が参加 |
| 平成 25 年 6 月 18 日 ～19 日 | 東北地区高専フランス短期留学生成果発表会を、本校を会場に開催 |
| 平成 26 年 1 月 11 日 ～13 日 | 平成 25 年度「学校の枠を超えた外国人留学生研修」を本校が主催 |

表 5 本校が主催した国際交流に関するイベント

なった。まず、平成 25 年 3 月 6 日～9 日の 4 日間、シンガポール・テマセクポリテクの学生 12 名と引率教員である Steven Lee 氏が本校を訪問し、日本の文化と秋田の伝統工芸を体験する短期留学プログラムに参加した。これは、シンガポール・ポリテクの学生 60 名を日本の高専に短期留学させ、高専とポリテクの学生との交流をさらに深める目的で高専機構が企画し、八戸、秋田、鶴岡、松江の各高専がそれぞれ独自のプログラムにより実施されたものである。



写真5 シンガポール学生が秋田の伝統工芸を体験

次に、例年 6 月下旬に東北地区の 1 高専にフランス人短期留学生が集まり、日本滞在期間に各々が行った研究成果を発表する機会を設けているが、平成 25 年度は本校を会場として 6 月 18 日～19 日の 2 日間にわたって行われた。通常審査員としてフランス技術短期大学側からは 2 名程度の教員が参加するのだが、今回はルール A 技術短期大学から 2 名、ランス技術短期大学から 2 名、カレー技術短期大学から 1 名の合計 5 名が審査員として参加し、フランス人学生 24 名の発表の審査を行った。会場からの質問も多岐にわたり、中には鋭い質問に戸惑う発表者もいた。

最後に、平成 26 年 1 月 11 日～13 日の 3 日間にわたり平成 25 年度「学校の枠を超えた外国人留学生研修」が本校主催で行われる。東北地区高専に留学



写真6 フランス人留学生成果発表会の様子

している学生が 1 カ所に集まり、学生間交流とその地域の文化を体験するという東北地区高専の持ち回り企画で、本校が主催するのは 7 年ぶりとなる。今回は「つくる」をテーマにして、「秋田ふるさと村」において秋田伝統工芸品の手作り体験や、「たざわこ芸術村温泉ゆばぼ」で留学生オリジナルのソーラン節の踊りをつくりあげることに挑戦する。

4. 今後の課題

本論のまとめとして、国際交流活動における今後の課題に触れておきたい。カリキュラム上の問題においては、現在フィンランドへの学生派遣に関する条件がまだ整っていない問題がある。これはフィンランドとの協定において、学生派遣期間は最低 3 ヶ月であることが求められているため、制度上 2 ヶ月程度が限度となっている本校の現カリキュラムでは対応できない。もうひとつは外国人との交流に対する意識の問題がある。海外からの留学生または教員と出会うと、一歩引いた感じで接しているか、悪い場合は逃げていく場面に今まで多く遭遇した。もう少し積極的な意識を持つだけで、本校の国際性はもっと向上し、交流活動が活発になっていくだろう。

謝辞

本論を執筆するにあたり、国際交流活動に対して指導・助言をいただいている山田宗慶校長、国際交流活動に協力していただいた脇野博教務主事、対馬雅己教授、国際交流室スタッフ、並びに関係教職員に対してここに感謝の意を表します。

注

- 1) 東北地区 6 高専とフランス・カレー技術短期大学との包括協定に関しては、平成 25 年 11 月現在において依然として未締結のままである。